

4. 体験学習プログラム ～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

ボランティア・NPO 活動センターでは、学生が夏季と春季の長期休暇期間を利用して、国内の地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地 NPO・NGO などとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ「体験学習プログラム」を実施しています。

2023年度は感染症対策には留意しながら、国内体験学習プログラムを2本、海外体験学習プログラムを1本実施しました。国内体験学習プログラムでは、9月にはNPO 法人 JUON NETWORK の協力のもと、徳島スタディツアーを、2月には東日本大震災の被災地のその後を学ぶ福島スタディツアーを実施しました。海外体験学習プログラムでは、今年度より海外渡航を伴うプログラムの実施を再開し、インド南部の街チェンナイとその近郊農村で女性のエンパワメントについて学ぶインドスタディツアーを実施しました。

事業名	2023年度 夏季国内体験学習プログラム（徳島） 『四国のへそ』で学ぶSDGsの架け hashi
日程	事前学習会：2023年8月24日（木） スタディツアー：9月5日（火）～9月7日（木） 事後学習会：9月15日（金） 学内報告会：10月4日（水）
訪問場所	徳島県三好地域（三好市・東みよし町）
参加人数	学生10名、引率2名（協力団体1名、本学教職員1名）
参加学生	宮原咲紀（国際4） 松本聖哉（法学3） 大谷一陽（社会3） 長谷宇大（経済2） 山中真央（文学2） 安宅天汰（社会2） 上前 泰（先理2） 板橋紗英（文学1） 今橋 智（文学1） 堀内 薫（社会1）
協力団体	認定 NPO 法人 JUON（樹恩）NETWORK および JUON 四国地域ブロック世話人会 公益財団法人 日本財団ボランティアセンター

1. 目的

2023年度夏期休暇中に実施するプログラムでは、森林保全を中心に取り組む NPO と連携し、徳島県三好地域で林業と福祉が融合した持続可能な取り組みを学ぶこと、そして参加学生がプログラムで学んだことに対して関心を持ち続け、その後のボランティア活動や身近な社会課題に対して一歩を踏み出せるような機会になることなどを目的に実施しました。

2. 概要

(1) 事前学習会（オンライン開催）：8月24日（木）
JUON NETWORK 事務局長の鹿住貴之氏より、日本の森林や林業の現状についてお話いただきました。

た。
(2) スタディツアー：9月5日（火）～7日（木）
現地訪問し、以下の体験や見学、お話を聴きました。

【1日目：9月5日（火）】

- ・京都からマイクロバスにて徳島県三好市へ移動
- ・三好市到着後、社会福祉法人池田博愛会『セルフ箸蔵』にて三好地域の森林林業・木材産業について学習
- ・祖谷街道の観光（かずら橋、再造林地など）
- ・宿泊先『角見の郷』にてふりかえりと交流会



【2日目：9月6日（水）】

- ・木材流通施設『㈱三好木材センター』および製材加工施設『NISMOC ㈱』見学
- ・社会福祉法人三好やまなみ会『ワークサポートやまなみ』および 樹の紙製造販売会社『㈱ビッグウィル』見学
- ・『セルフ箸蔵』にて樹恩割り箸製造体験
- ・宿泊先『角見の郷』にてふりかえりと交流会



【3日目：9月7日（木）】

- ・三好市内の森林にて植樹体験
- ・『セルフ箸蔵』にて総括ふりかえり後、三好地域を後に京都へ移動



(3) 事後学習会@深草キャンパス：9月15日（金）

現地訪問について改めて振り返り、意見共有等を経て学内報告会の内容を決定しました。

(4) 学内報告会@深草キャンパス：10月4日（水）

オンラインと併用で実施しました（P.33掲載）

3. 参加学生の声

- ・間伐の経験はあったが植林は今までしたことがなく、どのくらいの急斜面で木を植えるのかなど実際に体験したことで、植林の大変さを少しの間ではあったが実感できた。斜面の土は水が流れていくので軟らかかったが、平らなところは土が固まって掘りづらいなどの違いを学べた。
- ・訪問先の一つ㈱ビッグウィルさんでは、地元木材を使用したり雇用を生み出すなど、木材加工を通して徳島県への貢献や他の組織との連携などを行っていることを知り、自分の企業への考え方が変わった。
- ・セルフ箸蔵では、一般企業に就職が困難な人たちの中にいる働きたい人たちが働ける場を提供し、生活を充実させてほしいという想いで運営しているというお話が印象に残った。休憩時間に障がい者の方々とお話した時、全く知らない私たちが声をかけているのに嫌な顔をせず、笑顔でお話しをしてくれたことが嬉しかった。

4. コーディネーター所感

センターの『国内体験学習プログラム』では、コロナ禍前の数年間、遠方のプログラムとして福島県スタディツアー、近隣のプログラムとして滋賀県スタディツアーを実施してきました。貸切バスで長距離移動する福島は、参加人数を縮小しながら2022年度から復活しましたが、近隣プログラムはコロナ禍も含めて引き続き滋賀での日帰りで継続してきました。

当初は近隣プログラムを検討していましたが、学生にとってせつかくの夏季休暇中でもあるので、少し足を延ばした地域で活動できて学びになるものという方向にシフトして組み立てました。

また、当センターの役割として、地域で活動するさまざまな人・団体と学生をつなぐということもあり、過去にもお世話になったJUON NETWORKに協力依頼し、引率や現地プログラム全般をコーディネートいただきました。その中で学生たちが三好地域の皆さんと出会い、本気で地域課題に取り組む大人たちの姿から、社会問題を自分事として捉えたり、自分たちのこれからについても考えるきっかけになったと思います。

更に、費用面では日本財団ボランティアセンターと2022年3月に結んだ協定を活かし、共催事業として実施したことから、学生にとっても参加しやすい環境を整えられたと感じています。

今後も様々な切り口で学生の学びになるものを企画していきたいと思っています。

〈報告者：ヒギンズ 尚美
(瀬田キャンパス コーディネーター)〉

学生の報告はこちらからご覧ください。



事業名	福島スタディツアー ～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～		
日程	事前学習会：2024年2月7日（水） スタディツアー：2024年2月17日（土）～2月20日（火） 事後学習会：2024年3月5日（火） 学内報告会：2024年4月26日（金）		
訪問場所	福島県 福島市、南相馬市、浪江町、双葉町、富岡町、いわき市など		
参加人数	学生16名、教職員2名 合計18名		
参加学生	井原壮琉（文学2） 藤井瑞季（文学2） 坪久田さくら（経済2） 吉川鈴之助（経済2） 小林峻明（法学2） 北村尚暉（社会2） 蔵本千優（社会2） 土屋朝揮（農学2） 深堀綾香（農学2） 大久保桜（文学1） 佐藤美月（文学1） 安田 心（先理1） 中矢柊成（社会1） 細見恭大（社会1） 松浦晴香（社会1） 田中あかり（心理1）		
協力団体	NPO 法人うつくしまランチ／阿部農園／NPO 法人さぼーとセンターびあ／社会福祉法人南相馬市社会福祉協議会／一般社団法人いちばん星／俺たちの伝承館／F スタディツアー／原子力災害考証館 furusato		

1. 目的

ボランティア・NPO 活動センターが実施する国内体験学習プログラムは、学生が、該当地域の地域住民や NPO／NGO との交流を通じて、国内におけるその地域の抱える問題に触れるとともに、ボランティア等の体験学習を行なうことにより、より深く社会の問題について考え、その問題解決に向けて自

身の問題として考えるきっかけを作ること

を目的としています。
「福島スタディツアー」は2015年に開始し、福島県の NPO 訪問や地元住民との交流、町のフィールドワーク等を通して、津波・地震・原子力災害という複合災害が引き起こした課題と、そして課題解決に向けて市民がどのような活動を展開してきたのかなどについて、実際に現地を訪問して体感的に学び

ました。

2. 概要

(1) 事前学習会：2024年2月7日（水）

- ・東日本大震災～福島の状態について～
筒井のり子社会学部教授のお話
- ・参加に関する説明及び参加者自己紹介

(2) スタディツアー：2024年2月17日（土）～2月20日（火）

1日目：2月17日（土）

朝、京都駅を出発し、新幹線で福島市へ。

到着後、オリエンテーションの後、特定非営利活動法人うつくしまランチの方よりお話を聴きました。

2日目：2月18日（日）

午前：福島市内の阿部農園を訪問。梨農園を見学しながら、安全なものを提供するための努力や、農業の楽しさ等についてお話を伺いました。その後、浜通り地域へ移動。

午後：東日本大震災・原子力災害伝承館と震災遺構浪江町立請戸小学校および大平山霊園を見学



3日目：2月19日（月）

午前：南相馬市内のフィールドワークで、車窓見学およびロボットテストフィールド、俺たちの伝承館、大悲山の石仏を見学しました。



午後：社会福祉法人南相馬市社会福祉協議会の方々との交流プログラム。震災当時の社協

の葛藤のお話や震災当時を含む長きにわたり民生委員をされていた方の体験を伺いました。また、「防災・減災プロジェクトイザ！カエルキャラバン」の一部を体験させていただきました。

4日目：2月20日（火）

午前：Fスタディツアーの案内のもと、富岡町の慰霊碑や漁港を視察し、夜ノ森地区を歩きました。その後、大熊町の災害公営住宅や交流ゾーンがある地域を車窓視察しました。

午後：いわき市へ移動し、「原子力災害考証館」を見学し、館長の里見氏のお話を伺いました。その後、ふりかえりを行ない、特急電車及び新幹線を乗り継いで京都へ。



(3) 事後学習会：2024年3月5日（火）

スタディツアーから帰ってきて改めて考えたこと、取り組んだこと等について一人ひとり発表して共有した後、報告会で参加者に伝えたいことについて話し合いました。

(4) 学内報告会：2024年4月26日（金）

深草会場およびオンライン（Zoom）にて実施しました。

3. 参加者の声

・「復興」という綺麗な言葉の裏で山をいつのまにか削って地元の方々を傷つけているという掃部氏のお話を聞きました。でもそこで作られる再生可能エネルギーは私たちの暮らしのためのもので、何を信じたらいいのか、どこに怒りを向けるべきなのか、複雑な気持ちになりました。実際に、広い土地に広がるソーラーパネルをバスから見て、そこに福島の人々の暮らしがあったことを知ると、自分たちが使う電力のことを具体的に考えずにはいられません。正しい、間違っている、を曖昧な知識やイメージで判断してしまうのではなく、自分で見て聞いたことから、自分で考えることが必

要なんだと気づきました。それが「過去を知って未来に目を向ける」ということかなと思います。

- ・伝承館の展示を見て、一回の震災でここまで何もなくなってしまうのかと思い、そこに震災前までは街があったということが信じられませんでした。私は、震災から東北三県に思いを寄せインターネットで情報収集をしたり実際に現地に行き、震災を知ったつもりになっていました。しかし、私の地元には原発があり多額の交付金で地元が恩恵を受けているということから、原発事故が及ぼした被害からは目を背けてしまっていたということも事実です。今回、請戸小学校の展示で津波被害の後に捜索に入った人が、がれきの中から人の声があったのに原発事故の影響で避難せざるを得なくなり、救助に入れば助かった人に背を向けて逃げないといけなかったというのを見た。世の中にそんなことがあっていいのかという思いになりました。しかし、その後発表された当時の放射線の拡散予想ではそこは放射線の影響は低く救助できた可能性がありました。もっと、情報が早く発表されたら助かった命も多かったことも考えると、混乱しているときこそ情報の正確さ発表の迅速な対応が必要であると思います。

2. コーディネーター所感

体験学習プログラムの特徴は、参加する学生の学部や学年が多様であることだと思います。日頃学んでいることが異なる学生が集うことによって、同じ景色を見たり同じ話を聴いたりしても、印象に残ることや注目することが異なったりします。多様な価

値観が集まり、語り合うことによって互いに影響し合っていたように思います。あらためて、現場を訪れる事、顔を合わせて話をする事の大切さを感じました。

また、今回のツアーでは、4月で避難指示が解除となった富岡町の夜ノ森地区を訪問しました。12年前のままだるその地域の様子は、衝撃的でした。引率という立場での参加ですが、私自身も見て、聴いて、言葉にできない感情に包まれました。そして、たくさんの方に震災のこと、原発事故のこと、現在のことや未来に向けたお話を伺いました。自分自身の生活、生き方について改めて考える時間となりました。まだまだ整理がつかないこともありますが、学び考え続けていきたいと思います。

このスタディツアーは、多くの方のご協力のもと実施できています。お忙しい中、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

参加学生の報告は下記 QR コードからご覧ください。



〈報告者：國實 紗登美

（瀬田キャンパス コーディネーター）〉

事業名	2023年度 海外体験学習プログラム（インド） インドの農村で学ぶ女性の自立・教育・経済発展
実施日程	事前学習会：2023年12月1日（金）、22日（金） 2024年1月19日（金）、2月16日（金）計4回 スタディツアー：2024年3月2日（土）～3月11日（月） 学内報告会：2024年5月7日（火）
訪問場所	インド（チェンナイ及び近郊都市）
参加人数	学生13名、引率（本学教職員）2名
参加学生	石井真依子（文学4） 中山美代子（農学4） 黄堂紗文（文学3） 川口克基（社会3） 浦東香実（国際3） 森川鳳蘭（農学3） 吉田友鈴艶（文学2） 會田智昭（経済2） 大田雅響（政策2） 西田彩乃（経営1） 蔵田美海（国際1） 井田あい子（心理1） 林口結菜（先理1）
協力者・団体	企画・引率：大原 盛樹（本学経済学部 教授） Gandhian Unit for Integrated Development Education (GUIDE) 公益財団法人 日本財団ボランティアセンター

1. 目的

ボランティア・NPO 活動センターでは、治安や衛生環境などが安全と判断される海外において、学生がその地域の抱える社会的課題に触れるとともに、福祉分野、環境分野等の現地 NPO・NGO との交流を通して、ボランティア等の体験学習を行なうことにより、異文化間における相互理解と共生を学ぶことを目的としています。

2023年度は、インド南部の町・チェンナイとその近郊の農村部を訪れ、現地の女性たちのエンパワメントを学ぶという目的のもと実施しました。現地で長年活動する NGO の協力の下、農村部の女性の今と未来を見つめました。また、都市部チェンナイでは政府系機関等への訪問を通じて日本とインドの関係性を学びます。

本ツアーは経済学部大原盛樹教授に企画・引率を依頼し、実施しました。

2. 概要

(1) 事前学習会：

4グループに分かれ、上級生は現地での英語スピーチ内容を、下級生は現地中学校との交流会プログラムの内容を計4回の事前学習会で準備しました。また大原教授によるインドの歴史や文化に関するレクチャーを通して理解を深めました。

(2) スタディツアー：

以下のスケジュールにて体験や見学、お話を聴きました。

【1日目：3月2日（土）】

- ・7：15に関西国際空港に集合し、マレーシア

を經由してインド南部の街・チェンナイに深夜到着。

【2日目：3月3日（日）】

- ・インド日本商工会議所日本語学校訪問
現地学生との交流会／現地学生の案内の下、チェンナイ市内観光（ボンディバザール、エリオッツビーチ等）

【3日目：3月4日（月）】

- ・AIT-AP 大学の Ashraf 教授よりインドの女性エンパワメントと NGO についてレクチャー
- ・JETRO チェンナイ事務所訪問
- ・在チェンナイ日本国総領事館表敬訪問

【4日目：3月5日（火）】

- ・農村部へ移動（チェンナイより約2時間）
- ・現地 NGO 訪問、タミル語レクチャー
- ・紡績工場見学。工場で働く女性の環境を知る。
- ・パンチャヤット（自治組織）訪問。女性がリーダーの自治組織の在り方について学ぶ。



【5日目：3月6日（水）】

- ・現地 NGO より団体の説明及び農村部女性のお

かれた状況の紹介

- ・現地中学校訪問。文化交流会。
恋ダンス披露や日本文化クイズ、折り紙等

【6日目：3月7日（木）】

- ・現地 NGO よりこれまでの振り返りと今後の活動先に関するレクチャー。
- ・地域の大学病院訪問。地域医療の現状を学ぶ。
- ・農村訪問。有機栽培等の課題についてお話を聞き、実際に畑を見学。

【7日目：3月8日（金）】

- ・国際婦人デーイベントに参加。英語にて日本の女性が抱える問題をスピーチ。
- ・漁村訪問。スマトラ島沖地震以降の生活の変化について学ぶ。

【8日目：3月9日（土）】

- ・世界遺産がある町、マハーバリプラム観光（アルジュナの苦行、クリシュナのバターボール、パンチャラタ、海岸寺院）
- ・カンチープラムにてドラヴィダ様式寺院の見学



【9日目：3月10日（日）】

- ・7：45にホテルを出発し、チェンナイ空港からマレーシアを経由して関西国際空港へ。

【10日目：3月11日（月）】

- ・早朝5：40関西国際空港到着、セキュリティ通過後解散。
- (3) レポート提出：学内報告会で配布に向けて、事後レポートを作成し、提出
- (4) 学内報告会：深草・瀬田両会場をオンラインでつなぎ、実施しました。

3. 参加学生の声

- ・貧困層が住む農村地域では、初等・中等教育は直接職と結びつかないため、子どもが学校で学ぶことに否定的な親の価値観が影響している。私は今回のプログラムを通して、教育の重要性和自分が今まで享受していた環境が当たり前でないことを

学んだ。

- ・国際婦人デーのイベントでは、拳を突き上げ「strong women！」と連呼している姿が印象的でした。それらの姿は一見前向きに戦う素晴らしい女性たちですが、一方で「女性は強くあらねばならない」という強制意志のようなものを感じたり、女性たちが追い詰められているようにも思えました。インドでは女性差別や災害、気候変動の影響から強く行動しないと生きられないのかもしれない、私たち個人個人にできることはなんだろうかと考えました。



4. コーディネーター所感

センターの海外体験学習プログラムは、コロナ禍中はオンラインや国内でのフィールドワークで実施しており、海外渡航を伴うツアーの実施は4年ぶりとなりました。経済学部大原教授に企画・引率をお願いし、コーディネーターも同行して細心の注意を払って実施しました。コロナ禍前後で渡航のあり方も変わり、心配な点もありましたが、全員で無事に帰着することが出来ました。

今回のプログラムでは南インド・チェンナイを訪れました。空港に到着した時から日本とは違う文化の差を感じることが出来たように思います。空気・音・匂い等、現地に行かないと分からない事を、五感を使って体感出来ました。文化の違いに戸惑う場面もあったかと思いますが、全てが学生たちにとっていい経験になったと思います。

内容として、農村部で女性支援の活動をするNGOを訪問し、インドの農村部における女性のエンパワメントを学びました。日本とインド、一見すると全く違う課題を抱えているように思われますが、問題の根本は同じだということを学べたと思います。

フィールドワークを重視した内容で、数多くの方々のお話を聞く事ができました。現地で草の根的

に活動し、多くの方とつながりを持って活動している NGO の姿を見て、学生達も地域とのつながりの重要性についても自分事として感じる事が出来たと思います。

センターの理念・目的に『国際社会に貢献する』というものがあります。国内だけの活動に留まっているとこの視点が欠けてしまう事が多々あります。実際に海外に飛び出し、海外とのつながりを持つ事で自身が国際社会の一員だという事も実感できると思います。

また費用面では日本財団ボランティアセンターとの共催事業として実施しました。おかげ様で参加しやすい金額で実施することができ、多くの学生から参加申込がありました。

今後ただ海外の文化や語学を学ぶだけのものではなく、その国が抱える社会課題に正面から向き合えるプログラムを企画していきたいと思います。

学生の報告はこちらからご覧ください。



〈報告者：吉田 裕貴

（深草キャンパスコーディネーター）〉

事業名	体験学習プログラム報告会
実施日程	①夏季（徳島）報告会：2023年10月4日（水）18時00分～19時15分 ②春季（福島）報告会：2024年4月26日（金）17時15分～18時30分 ③春季（インド）報告会：2024年5月7日（火）17時15分～18時30分
実施場所	①深草キャンパス和顔館 B109／瀬田キャンパス 2 号館103／オンライン（Zoom） ②深草キャンパス和顔館アクティビティホール／オンライン（Zoom） ③深草キャンパス和顔館アクティビティホール／瀬田キャンパス 2 号館219／オンライン（Zoom）
参加人数	①夏季（徳島）報告会：約40名 ②春季（福島）報告会：約45名 ③春季（インド）報告会：約45名

1. 経緯・目的

参加した学生がどのような事を学び、考え、今後の活動にどう活かしていくのかを発表する機会を作り、参加者自身の整理や、プログラムに参加していない学生に学びを共有する事を目的に報告会を行いました。

2. 概要

下記3プログラムに参加した学生が、それぞれの体験を通じ、学んだ事・考えた事を報告しました。プログラムに参加した学生以外に、プログラムに関心を持つ学生や、国内体験学習プログラムではスタディツアーに協力いただいた団体の方々にオンラインでご参加いただきました。

(1) 夏季国内体験学習プログラム

『四国のへそ』で学ぶ SDGs の架け hashi



(2) 春季国内体験学習プログラム

福島スタディツアー ～福島「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～



(3) 春季海外体験学習プログラム

インドの農村で学ぶ女性の自立・教育・経済発展



3. コーディネーター所感

徳島報告会では、ツアーに参加した学生が2チームに分かれて「三好林業と森林保全」「林業×福祉」というテーマで報告しました。今回のプログラム協力団体のJUON NETWORKや現地でお世話になった徳島県三好地域の皆さんも、オンラインで参加してくださいました。

福島報告会是对面会場（深草キャンパス）とオンラインで報告会を実施しました。福島で体験したことと共に、そこで抱いたモヤモヤした感情や、他人事ではなく自分事として考えていかなければならないということを伝えました。報告会に参加されたみなさんが、自分事として考える機会となっていたら幸いです。

インド報告会では4グループに分け、分担して学んだ事を報告しました。今回は訪問場所が多岐に渡り、多角的な視点からの学びがあったため、分担して話す事でそれぞれの学びがより分かりやすく伝わったかと思います。

どのプログラムも当初の予定を超える時間の報告会となりましたが、それだけ参加者の伝えたい想いが溢れたのだと思います。今回得た学びが1人でも多くの人に伝わり、社会を動かす一歩目になればと思います。

< 報告者：吉田 裕貴

（深草キャンパス コーディネーター）>